

自分の「時」を採れ

上野直蔵

ご卒業おめでとうございます。昔は卒業式では、式辞、送辞、答辞などで、「蛍雪の功成り云々」という一節が必ず入ったものです。つまり、蛍を集めて書を読み、雪を積んでそのほのあかりで文字を追ひ、とうとうその苦勞がみのって……ということでした。大昔は燈火のもとになる油やろうそくはまことに貴重なものであったので、日が暮れてもそう容易に屋内であかりを求めることはできない。それで夜を徹して書見するために、こういう手段までとって刻苦勉強した、ということでしょう。この中国の故事の典故はともかくとして、昔の文字は大きかったから、これくらいのことではできたでしょう。まあ、現代の大学生諸君は動画、漫画本で育っているから、蛍雪の功も実践しやすいかもしれません。

いずれにしても蛍雪の時代を終えられました。ひとつの節というか、ふしめをすまされたわけです。思えば、昔のように人生五十年とすると、その三分の一強は確実になんらかの意味で学校とい

う機関で人生の大半を過ぎたのです。これはおどろくべきひとつの時代であります。その時代の区切り、最後の区切り、として今日の日があるわけです。

われわれは時間とか時の経過を、たいして深くも考えずに、時計とカレンダーだけにまかせているようです。世界に共通の一定の時の計算法をもっていて、自らひとまひとまの時の意味を窺見し、時の経過に意識的に参加して自己確認をする努力を払うよりは、時を既製の与えられたものと認識し、それに無抵抗に一任している方が安心であります。しかしわれわれ人間は、実はひとりひとりその属する大小の集団ごとに特別に経過する「時」にいろいろのかたちで自分を委ねているのです。違った風に流れる時に幾通りにも身を委ねているのです。早い話が、一斉に太陽暦の時の計算に服従していても、それを共分母として各人は違った時の感覚をもっております。ひとりひとりがそれに参加し、それにまもられ、それに協力して自分を意識する集団の相違によって、各人には違った「時」が流れています。農村生活の「時」、都会の会社生活の「時」、学校生活の「時」、家庭生活の「時」、芸能人の「時」、作家や詩人の「時」等々。聞くところでは、今でも東南アジアのある地方では四月を年のはじめとするとか……。それは稲作のリズムにあわせた一年の農閑期にあたるのだそうです。そこでは自然の運行にあわせた農作が時計であるわけです。同じようなことが狩猟民族とか、放浪民族にもいえるのではないのでしょうか。西欧の中世では、さまざまな時が同時に集団毎に流れていました。教会は教会暦を採用し、何月何日といわずに「マゲダラの聖マリヤの祝日」とか「聖マリヤのお潔めの祝日」とか言っておりましたし、降誕祭を年の始めと考えていたようですが、地方によっては「聖マリヤのお告げの祝日」（三月二十五日）を年度変りにしていたところもあります。農村中心ですと、秋の犁返しと冬麦の播種が済み、すべての作業が終った

頃、十二月二十五日と一月六日（御公現の祝日）の間に新しい年を意識したようですし、当時の占星学によりますと、今の三月二十一日を一年の出発点ということにします。ですからそもそも現行の人工的目盛りによる時間の区切りは文明社会の人間の営みという人間側の都合にあわせたものでありまして、本来は地球上のいつでも、どこでも、同じく通用するという類のものではなかったのです。

諸氏たちに関与し、諸氏たちが関与してきた「時」というならば、すなわち同志社大学の「時」でありましょう。大切な学問による人間形成という軸に流れる「時」の中で諸氏は過ぎられたのです。それは決して、一講時は九時から十時三十分まで、二講時は……という教務側の都合にあわせた時間の目盛りにまかせて過した、という意味ではありません。昔の人は自然の運行に自らを委ねて時を経過せしめました。現代ではその自然にかわるものが情報であります。今日ではこの情報が洪水となって新聞、雑誌、週刊誌、テレビが次々と新しい情報を伝達し、その情報に追いつくのに息もつけぬくらいであります。そういう意味でなら、単に同志社大学の教務部の提供する時間の目盛りを基準としたカリキュラムをこなしても、それは情報の受け手として学園生活を過したのと異なりません。おそらく同志社大学が流した情報は、ほんのわずかの部分しか自分のものにはされていません。おそらく同志社大学が流した情報は、ほんのわずかの部分しか自分のものにはされてないと思いますし、またそれも自然なことでもあります。本学の提供した学問、知識を含めた情報を全部自分のものにしたとすれば、それはまさに生けるコンピュータ、非人間性も極まれりといつてよろしいでしょう。問題はこういう情報の洪水の中でいかに自分を発見し、自覚し、生きたか、ということでもあります。情報に則して生き、その多くの部分を自家菜籠中のものとし、よい成績をあげ……まさに柔軟で有能な学生ではありませんが、実はそれは極めて不安定、不安なものでは

ないでしょうか。

現代は確かに一種の末世を思わせるような時代です。列挙するだけでもおどましくなる一連の事件が国の内外で起っています。大なり小なり、自然に、ではなく、情報機械文明にあわせた「時」の流れに身を托しているがゆえに惹起された事件のようです。それはそれらの事件の非人間性に思いをいたすだけで十分に納得できるものだと思います。精神的に闇の時代といってよいかもしれせん。情報に調整さえしておれば、身は安全でありましょうが、心が安全でなくなるという意味です。諸氏、同志社大学に在学中、何度か耳がタコになるほど接したかもしれない言葉をやはり今日もお伝えしましょう。校祖新島 襄の「一国の良心とも謂うべき人」としての自分を省みてください。「一国の良心」とは何ぞや、ということをごで論じることがやめましょう。「一国の良心」に流れる「時」をいかに自分たちがお使いになったか。それを反省してみましょう。パウロがエペソ人へ与えた手紙の中にこういう一節があります。「今日の時を生かして用いなさい」(第五章、十六節)というのですが、それには条件がついている。「今は悪い時代なのだ」ということです。世を捨てるでもしなければその中で生きていくことのできないこの没個性、非人間性を強いる情報文化の時代において、その情報が縛りつけてくる「時」に抵抗しましょう。それにはしっかりとした人間としての自覚をもって、情報を最大限に最大善に転用しうる自分の「時」をもちましょう。そういう主体性にめざめましょう。「一国の良心」とはまさにそういう自己認識のことを言うのであります。そのためには諸氏は眠ってはいけません。いつにても自己にめざめ、そして、できれば、神にめざめてほしい。光の中を歩んでほしい。同じエペソ人への手紙の中で、パウロは「今の時を生かす」ことを薦めるに先だって、

「眠っている者よ、起きなさい。

死人のなかから、立ち上がちなさい。

そうすれば、キリストがあなたを照らすであろう。」

という古い歌を引用するのです。

単に情報文明に自己を利口に調節して同志社大学の「時」を過してこられたのなら、それは先程も申しましたように、もっとも安全な道を通ってきたかのようにありますが、不安、不安定な道であつたのです。「眠っていた」のです。

同志社大学の「時」をふまえておのがじし新しい人生の「時」に突入される諸氏、どうぞいつも「起きて」いてください。そして自分の「時」を模索しましょう。生涯かけて……。

ご静聴を感謝します。

(同志社総長)

卒業を祝して

木 枝 燦

卒業生の皆さんに心からお祝いを申し上げます。日本では学校を卒業して社会人になることを学業成って「巣立つ」と言いますが、米語では「開始」という意味の“Commencement”がそれに相当します。同志社大学を巣立った人々、すなわち校友は既に約十四万人に達し、それぞれの場所において「良心を手腕に運用するの人物」として大いに活躍しております。皆さんも同志社大学を生涯にわたってなつかしい母校とし、卒業生である事に誇をもち、先輩の方々に劣らず力強く清新な気概をもって活動を開始される事を祈ります。

これから皆さんは新しい場所で新しい仕事に責任をもち、その結果として報酬をえられるのですが、その意義をよく考えて下さい。実務に馴れない間は戸惑うことも多いでしょう。大学で学習し研究した内容はそのまま活用できないかも知れません。しかし日常業務の瑣末な中にも注意すれば興味深い発見があるでしょう。例えば一つの品物を運ぶという単純な作業過程の中にも研究テーマ

とし、アイデアを発展させる内容はある筈です。与えられたり選んだりした仕事が最初は気にいらなくても、頭脳を活用して何かを見出し、自ら試みて新しい知恵に形成していくこと、抽象することから具体化への道筋を身近かな小さいことからでも試み、不馴れな仕事の中に興味をもって精進すること、その事へ報酬は支払われ、大学卒業生としての期待もなされるのだと思います。

若い皆さんは柔軟な感性をおもちです。通常、感性というのは感覚的な受容によって生ずる感情や情緒のような心の能力を言うのでしょう。感覚器官に映じないものを心のうちで見ぬく能力を英知と言いますが、感覚器官の働きと英知との間に起きる共鳴をわたくしは今、知的な感性と呼びたいと思います。それを養うために、まず広い範囲の読書をして下さい。速読するか精読するかの判断が必要です。さらに物事をじっくり見つめて下さい。対話をして下さい。相手の話を十分に聞いて下さい。メモをとり、スケッチをして下さい。ユーモアも大切です。何かひっかかるものを感じとり、知的な感性でその内容を粘り強く分析して下さい。結論を急いではなりません。そして結論はあなたが判断することであり、あなたの意志となり責任を伴うことを自覚せねばなりません。

皆さんの多くは組織の構成員となります。そこにはそれぞれ組織の原則やルールがあり、それに従わねばなりません。組織は複雑な人間関係の網目でもあり、日本の社会では面子とか義理とかがルールを曲げようとしています。しかし皆さんは広く外国にも出て行き、他国の人々を相手に仕事をしなければならず、そこでは違ったルールもあります。仕事としてのルールを守ること、例えば相手と商談をする約束時間に遅れたとき、理由が何であっても遅れたという事実は曲げられません。人力の及ばない不可避の原因による場合でも、仕事の上での責任はとらなければならない。ですから遅れないよう予め十分に気づかりし、最悪のケースまで想定し心づもりしておく必要があります。

また最悪困難なケースを避けようとして十分分析もせず、はじめから安易さのみを求めてはなりません。学生時代の単位とか成績、その他もろもろの事は今はもうノーサイドとなりましたが、これからはもっときびしい様々の試験をくぐりぬけていかねばならないでしょう。

一つの仕事に取り組む時、見る 気付く 知る 工夫する などを単なる継起とせず知性との間に共鳴を起こして知的な感性を働かせ、気力を充実させて決断によって意志を決めこれを実行への出発点とします。ここまでする精神力とっていいでしょう。出発したら耐久力によってフィニッシュにもちこむこととなります。スタートと耐久性とフィニッシュが実行力を構成しますが、精神力との間には常にフィードバックを保ち両者連携の相乗力を発揮することです。そして成功すること、うまくいかないこともありましょうが、いずれも貴重な経験として将来に生かして下さい。

「良心之全身ニ充滿シタル丈夫ノ起リ来ラン事ヲ」

卒業生の皆さん、折があれば、新島 襄先生の言葉を刻んだ石碑の前に立ち寄って下さい。アイデアに富んだ研究課題を携えて研究室を訪れて下さい。

島崎藤村に、「心を起さうと思はば、先づ身を起せ」という言葉があります。

若さの満ちあふれている今日の日を、希望に満ち気力に満ちてしっかりと歩まれんことを。

「耐えつる者は幸いなり」

この聖句を結びとして、皆さんの前途のご健康とご多幸を祈ります。

(同志社大学長)

科学と人間性

岡野 久二

今春大学を卒業する人たちが、三十才代の後半を迎え、人生において働き盛りの時期になった時に、新しい世紀、二十一世紀がやってくる。二十一世紀のわが国を背負っていく運命にある人たちの実社会への門出に際して、大きな期待をこめて、「ご卒業お目出とう」と、お祝いの言葉を贈りたい。

来るべき新しい世紀の世界が、どのような様相を呈しているかについては、さまざまな予測がなされているが、それを現時点で即断することは難かしい。「一寸先は闇」と言われる人間生活の中では、明日のことを予言することさえ困難である。しかし、イギリスの作家、ジョージ・オーウェルが、第二次世界大戦後（一九四九年）、三十五年先を予見した「一九八四年」という未来小説を発表している。その中では、世界が三つの巨大な全体主義国家、オセアニア（Oceania）、イースタシア（Eastasia）、ユーラシア（Eurasia）に分れて、果しない戦争をくり返している。オーウェルは、

そんな世界の中で、政治的自由のみならず、人間の精神的自由まで奪い、人類を永遠の窮乏と戦争に陥れる全体主義の恐ろしさをすさまじい筆致で描いている。物語の主人公で、オセアニアの官吏であるウィンストン・スミスの生活はテレスクリーンによって監視されている。「ウィンストンがどんな声を発しても、聞きとれないほどのささやき以外はすべて、このテレスクリーンに捕捉されてしまう。……思想警察が個々の電送線に差し込みを入れて盗聴する回数や方法はただ推測して見るしかなかった。だれも彼も常に監視されているのだと考えてさしつかえなかった。」こうした、個人の思想や行動が無法に管理されている全体主義体制に、ウィンストンは反逆を試みるが、たちまち屈服させられてしまうというのが、「一九八四年」の内容である。オーウェルは一九八四年の世界を全体主義に制圧された社会と予見しているが、現実に一九八四年が訪れてみると、オーウェルが三十五年前に想像した世界と似た点が多いのに驚く。全世界が全体主義に席卷（せうけん）されてはいないが、政治的には、米ソを両極にして、世界が二分され、各国がそのいづれかの影響下にあるのが実状である。将来、中国が巨大国家として成長すれば、オーウェルの予想した世界の三大勢力図が出来るかもしれない。また、現在も世界のどこかで戦火が続いているのもオーウェルの描いている通りである。それに、政治的弾圧のみでなく、色々の面で、人間生活を管理する要素を現代社会が内包していることは否定出来ないであろう。

オーウェルの「一九八四年」と現実が大いに異なっているのは科学の面である。「一九八四年」に出てくる「テレスクリーン」はラジオと盗聴器を組合せたようなものらしいが、さすがのオーウェルも、現代ほど科学技術の革新が飛躍的な進展をみせるとは想像出来なかったらしい。事実、エレクトロニクスを中心にした現代の技術革新は人間の想像をはるかに超越して、科学が一人歩きしている感がある。最近話題になっているニューメディアは、コンピュータと通信の革新技術の落とし子と言われているが、それに付随して、INS（高度情報通信システム）、CATV（有線テレビ）、ビデオテックス、文字多重放送、光ファイバーケーブルなど、ニューメディア関連の新用語

がはん乱して、消化不良を起しているのが現状である。ワード・プロセッサーやパソコンに驚いていたら、次は、ニューメディアに振り廻され、右往左往しているのが現代人である。しかし、ニューメディアを先兵として、来るべき時代が、高度情報化社会となることは間違いない。それがどんな社会になるのか、明確な予想をすることは不可能であるが、想像を絶する科学社会が出現するように思われる。オフィス・オートメーションが進めば、会社に出勤する必要はなくなり、在宅勤務ですべての仕事が出来るようになる。ホームショッピングやホームバンキングが実現すれば、日常生活は自宅に居ながらにして営むことが出来る。そんな生活が出来れば便利であろうが、ただ喜んでばかりはいられない。オーウェルは人間生活を完全管理する全体主義の恐怖を描いているが、科学技術の過度の進歩によって、人間生活が科学によって支配される時代が訪れる危険性がある。そこで考えなければならないのは、科学技術は人間の頭脳によって促進されているのであり、結局は人間精神の財産の一つなのであるから、科学によって支配されるのではなく、科学を支配する立場で、科学技術を日常生活の中で利用し、人間性の向上に役立てるように心掛ける必要がある。

来るべき新しい時代は、科学技術の革新を中心にして、あらゆる面において、目ざましい進歩発展が見られ、政治、経済、文化の多方面にわたって、国際化も一層進むことであろう。そうした時代の担い手である卒業生諸君は、いつまでも新しいものに對するみずみずしい好奇心を失わず、偏狭でなく、寛大な度量をもって、どんな事態にも対応出来る清新で柔軟な精神を持ち続けて欲しいものである。そして、科学の進歩によって毒されることのない、豊かで自主的な人間性の練磨に務め、新しい時代に訪れて来る幾多の険しい道を克服し、実り多い人生を歩まれるよう祈って止まない。

(同志社女子大学長)